

コリントの信徒への手紙第二 5 章

17 だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。

古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。

18 これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。

19 つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。

20 ですから、神がわたしたちを通して勧めておられるので、わたしたちはキリストの

使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。

21 罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです。

コロサイの信徒への手紙 1 章

27 この秘められた計画が異邦人にとってどれほど栄光に満ちたものであるかを、神は彼らに知らせようとされました。その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です。

コリントの信徒への手紙の部分ですが新改訳聖書ではこう訳されています。

だれでもキリストのうちにいるなら、その人は新しく造られた者です。

古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

これらのことはすべて、神から出ているのです。神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。"

コリント人への手紙 第二 5 章 14～18 節

* * * *

1)キリストのうちにいるなら(In Christ)

イエス様との関係について、最近気になっている言葉があります。

それは「キリストを心に迎え入れる」という表現です。聞き慣れた言葉ですし、その言葉自体、理解できるのですが、どうも、パウロが語っているキリストとの関わりとはちょっと異なっているように思うのです。

パウロはコリントの信徒への手紙第二の 5 章の中で

17 だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。

古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。

と書きました。

ここにある結ばれるという表現、「キリストにある」「キリストのうちにあるなら」という表現は、「キリストの中に置かれる」と考えたらよいかもしれません。

とすると、自分の人生のすべてが「キリストの中に置かれた」存在であると聖霊により、御言葉により気付かされた人は、新しく創造された者なのだという事になります。

これはとても大事な教えです。

キリストを心に迎え、歓迎することが間違っているわけではないと思いますが

パウロはとても明確に「私たちがキリストの中に置かれている」「キリストの愛と主権、ケア」の中に置かれているのだと心から頷けた時、私たちは新しく創造されたものとなっている、つまりクリスチャンになっているということなのです。

キリストを心に歓迎したことのある人は、しっかり思い出してください

その時、あなたはキリストの愛と支配のなかに置かれたのです。

どこに行っても、何をしても、あなたはキリストの愛の中に置かれているのです。

そして、そのとき、「新しく創造された者」とされているともパウロはいいます。

「新しい創造」と言われても、何も変わっていないような感じですし、期待はずれだと思う方もおられるかもしれません。

この新しいという概念には二つあると言われます。

ひとつは「古いものを廃棄して新しいものに入れ替える」という新しさ。

これはパソコンや携帯、カメラなど、古いものを廃棄して新機種に変えるという場合の

「新しさ」これはいわば「入れ替え」「買い替え」による新しさ。

もうひとつは、「古いのだけれど、良いところを見つけて使い続け、それ自体は変わらず古いのだけれど、リフレッシュされて新しい輝きを保つ」

いつでも、丁寧なメンテナンスをしていただいて、気力、意欲が新鮮に前向きにされつつ生きるという新しさ」

パウロは、そういう新しさを伝えていると思います。

この身体は衰えていくのです。でも、心には常にみ言葉による感じ取り、気づきがあり、新鮮に人生に向き合っていける霊的なスタミナが常に新たに供給されるのです。

しかし、同時にパウロは

コロサイの信徒への手紙の中に

コロサイの信徒への手紙 1 章

27 この秘められた計画が異邦人にとってどれほど栄光に満ちたものであるかを、神は彼らに知らせようとされました。その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です。

と書きました。

私たちはキリストの中に置かれていると同時に、そのキリストは私たちのうちにいてくださるということです。

そのお方がうちにいてくださることを実感しながら歩めるなら、常に「希望」がそこにあるのです。

そのお方は私たちを見捨てず、見放すこともせず、常にわたしたちの弁護者、味方になってわたしたちの内にいてくださいます。

これまた、大きな励ましです。

私たち自身の内にも外にもイエス・キリストの愛と守りが豊かにあるのです。

* * *

死に至るまでの従順と勇氣

[大坂](#)と京都でフランシスコ会員 7 名と信徒 14 名、イエズス会関係者 3 名の合計 24 名が捕縛された。ちなみに、二十六聖人のうちフランシスコ会会員とされているのは、[スペイン](#)のアルカンタラのペテロが改革を起こした「アルカンタラ派」の会員達であった。

24 名は、京都・堀川通り一条戻り橋で左の耳たぶを切り落とされて(秀吉の命令では耳と鼻を削ぐように言われていた)、市中引き回しとなった。[1597 年 1 月 10 日](#)、長崎で処刑せよという命令を受けて一行は大坂を出発、歩いて長崎へ向かうことになった。また、道中でイエズス会員の世話をしよう依頼され付き添っていたペトロ助四郎と、同じようにフランシスコ会員の世話をしていた[伊勢](#)の大工[フランシスコ吉](#)も捕縛された。二人はキリスト教徒として、己の信仰のために命を捧げることを拒絶しなかった。

厳冬期の旅を終えて長崎に到着した一行を見た責任者の[寺沢半三郎](#)(当時の[長崎奉行](#)であった[寺沢広高](#)の弟)は、一行の中にわずか 12 歳の少年ルドビコ茨木がいるのを見て哀れに思い、「キリシタンの教えを棄てればお前の命を助けてやる」とルドビコに持ちかけたが、ルドビコは「(この世の)つかの間の命と(天国の)永遠の命を取り替えることはできない」と言い、毅然として寺沢の申し出を断った。

処刑当日の 2 月 5 日、長崎市内では混乱を避けるために外出禁止令が出されていたにもかかわらず、4000 人を超える群衆が西坂の丘に集まってきていた。パウロ三木は死を目の前にして、十字架の上から群衆に向かって自らの信仰の正しさを語った。

*

「ここにおいでになるすべての人々よ、私の言うことをお聴き下さい。私はルソンからの者ではなく、れっきとした日本人であってイエズス会のイルマン(信徒の修道士)である。私は何の罪も犯さなかったが、ただ我が主イエス・キリストの教えを説いたから死ぬのである。私はこの理由で死ぬことを喜び、これを神が私に授け給うた大いなる御恵みだと思う。今、この時を前にして貴方達を欺こうとは思わないので、人間の救いのためにキリシタンの道以外に他はないと断言し、説明する。」

「キリシタンの教えが敵及び自分に害を加えた人々を許すように教えている故、私は国王(関白)とこの私の死刑に関わったすべての人々を赦す。王に対して憎しみはなく、むしろ彼とすべての日本人がキリスト信者になることを切望する。」

群衆が見守る中、一行が槍で両脇を刺し貫かれて絶命したのは午前 10 時頃であった。

* * *

youtube での MACF 礼拝映像は

https://youtu.be/p_cQoB2IKDo